



Data

監督：王浜・水華

出演：田華／張守維／李白萬／胡朋
／趙路／陳強／李玉林／李
波／管琳／大鎖

👁️👁️ みどころ

地主打倒！八路軍万歳！共産党万歳！そんな「革命歌劇」が、新中国建国後の1950年に映画化されてスクリーンに！

暴虐の限りを尽くす地主の仕打ちに耐えた白毛女とその村は八路軍の入村によって、今やっと解放！「国民党支配下の旧社会は、人を鬼（妖怪）にするが、共産党による新社会は鬼を人にする」。そんなテーマの本作は映画としての面白みには欠けるものの、なるほどこれが白毛女！いつか、そのパレエ版も見なければ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■これは必見！■□■

私は中国映画を250本以上観ているが、日中戦争時代のいわゆる「反日映画」は全然観ていない。私が観た中国映画で一番古い名作は、費穆（フェイ・ムー）監督の『小城之春』（48年）。これは2004年にシネ・ヌーヴォーで開催された「中国映画の全貌2004」の時に観た合計31本の中国映画のうちの1本だが、03年8月にそのリメイク版として田壮壮（ティエン・チュアンチュアン）監督が2002年に作った『春の惑い』と対比して観ることができたのはラッキーだった。『小城之春』は中国本土から日本軍を追い払った日中戦争直後の1946年を時代背景とした「不倫ギリギリ」の人間ドラマだから、そのような映画が1948年に作られたこと自体が驚き。したがって、張藝謀（チャン・イーモウ）監督ら多くの映画人から中国映画のベスト1と言われながら、1949年10月1日の中華人民共和国の成立後も長い間この映画が黙殺され、日の目を見なかったのはある意味当然だった（『シネマルーム5』115頁参照）。

それに対して、『小城之春』と同じように、あるいはそれ以上に中国でも日本でも有名な

のが革命直後の名作として常に真っ先に名前が挙げられる『白毛女』。これは延安の魯迅芸術文學院の集団創作による革命歌劇で、中国では1944年もしくは1945年に初演され、その後1950年に実写映画となる本作が製作され、日本では1955年に上映されたらしい。驚くべきは1948年に立ち上げられた松山バレエ団がこれを1955年にバレエ化し、1958年に中国でこれを上演したこと。日本と中国は2012年7月に日中国交回復40周年を迎えたが、その特集番組では1972年7月に来日した上海バレエ団が日生劇場をはじめ、日本各地で、バレエ版を上演したことを再三映し出していた。

以上は『白毛女』についての私のごくわずかな知識とネット情報によるもので、前々から「これは必見！」と思っていた映画だが、シネ・ヌーヴォで日中国交正常化40周年記念として「中国映画の全貌2012-3」が開催され、中国・香港映画24本+未公開上映2本全26作品が一挙上映される中に『白毛女』が選ばれたことはラッキー。さて、そんな曰く因縁付きの作品『白毛女』って、一体どんなストーリー？

■□■時代は？舞台は？主人公は？■□■

今回の「中国映画の全貌2012-3」は日中国交回復後、日本中国友好協会に寄贈されたフィルムをデジタル化したものから、『農奴』『白毛女』『阿片戦争』『五人の娘』『ニエ・アル』の5作品を公開したが、元が古いものだけに、いくらデジタル化しても映像があまりよくないのは仕方ない。

本作の時代は1935年、舞台は河北省のある寒村。主人公（ヒロイン）はその村の貧農・楊白勞（張守維）の娘・趙喜兒（チャオ・シーアル）（田華）だ。張藝謀監督の「しあわせ3部作」と呼ばれる『あの子を探して』（99年）、『初恋のきた道』（00年）、『至福のとき』（02年）（『シネマルーム5』188頁、194頁、199頁参照）を持ち出すまでもなく、1950～70年代を舞台とした中国映画では「貧しさ」がキーワード。しかして、『初恋のきた道』では若い先生に提供する毎日のお弁当やデビューしたての章子怡（チャン・ツイイー）が作るきこ餃子が大きなウエイトを占めていたが、『白毛女』のヒロインたちに見る貧しさはそれをはるかに通り越している。趙家の隣には同じ貧農の王家が住んでおり、その息子・王大春（李白萬）は趙喜兒との婚約が決まっていたが、本作前半の注目点とはにかくこの楊家と王家の貧しさ。彼らは朝から晩まで一生懸命に働いているのに、なぜまともに食うことすらできないの？その答えは、悪徳地主の黄世仁（陳強）が小作人たちを支配し、搾取しているからだ。なるほど、こういう現実を見れば、なぜマルクスが工場労働者の姿を見て『資本論』を書き、なぜ毛沢東が中国の農村から反地主・打倒地主の革命を起こそうとしたのがよくわかる。本作にみる「重税ぶり」にくらべれば、昨年8月に野田政権が漸行した消費増税がいかにかチャチなものがよくわかる。

大晦日には借金を返すのが当然。そんなしきたり（？）に沿うべく、王大春と趙喜兒が危険を冒しながら薪を集めるアルバイトをした甲斐もあって、楊家は何とか借金の利息だけは地主に返済することができたが、そこで黄世仁は元金も全額支払えと要求してきたからムチャクチャ。中国では、今でも人身売買が半公然と行われているらしいが、スケベ地主の黄世仁がそこで目をつけたのが、嫁入り前で今や魅力いっぱい趙喜兒だ。本作にみ

る黄世仁と楊家の人身売買契約（？）はさすがに今の法治国家中国では無効だろうが、1935年のこの寒村では？

■□■暴虐の限りの中、希望の星は？■□■

今の中国では、中国版ツイッターである「微博（ウェイボー）」が発達、浸透しているから、現状に不平不満を持つ若者たちは、微博への書込みによって欲求不満を多少なりとも晴らすことができるし、少なくとも多くの問題点を若者たちが共有することができている。しかし、1935年の王大春や趙喜兒たちが住む小さな村では他の村の情報などまったくないから、黄世仁のような悪徳地主から虐げられるだけ虐げられて、暴虐の限りを尽くされても、それに対抗する手段は何もないのが実情だ。泣く泣く王大春との結婚を諦め、黄世仁の屋敷内に入った趙喜兒は、黄世仁の母親（李波）の女中として働いている張おばさん（管琳）の機転によって母親付けの女中になることができたため、何とか黄世仁の魔の手から落ちるのを免れていたが、ついにある日黄世仁のレイプの手が……。これに絶望し、自殺しようとした趙喜兒を張おばさんは懸命の説得によって思いとどませたが、それを聞いた婚約者・王大春の悔しさはいかばかり……。

この世には神も仏もないものか……。そんな思いの2人に対して、「希望の星」として届いたのは趙じいさん（趙路）が語る「赤軍」の話。彼の話によると、黄河を西に渡ったところには「赤軍」がおり、その「解放区」では土地を皆に配分する公平な社会が実現されているらしい。ホントにそんな理想の国があるのなら、2人でこの村を脱出し、赤軍の村を目指そう。張おばさんの勧めもあって2人はそんな決心をしたが、裏門から出ようとするのを拳銃をもった黄世仁たちに発見されたため、何とか王大春だけは脱出できたものの、趙喜兒は再び屋敷内に。そして王大春の行方もわからない中、ある日趙喜兒には妊娠の兆候が。お腹の子の父親はまちがいなく黄世仁！そんな絶望の中、再び趙喜兒は黄世仁の屋敷を逃げ出したが、身重の体では逃げ足は知れたもの。それでも必死の思いで山に登り、山奥の洞穴にたどり着き、雨の中一人で赤ちゃんを産み落としたが、それを育てるのはとてもムリ。泣く泣く赤ん坊を土の中に埋めた趙喜兒はその後一人で山奥の洞穴に住み、社のお供え物や草木などで細々と食いつないでいたが、その趙喜兒の希望の星は？

■□■なるほど、これが白毛女！■□■

張藝謀監督は女優探しの名人だったから鞏俐（コン・リー）や章子怡などの美人女優を発掘し、世界的スターに育てあげたが、1950年公開の中国映画ではそこまでの美人女優を期待するのはムリ。とはいっても、趙喜兒を演ずる田華は見る角度によっては美人にみえないこともないうえ、後半「白毛女」になってからは俄然存在感が増してくる。

本作は劇映画であって、もちろんミュージカルではないが、劇中に『北風吹』というテーマソングが歌われ、そこだけはミュージカル仕立てになっているところが面白い。村人の中では、いつの間にか山奥の社には「白毛の仙女」が住んでいるという噂が立っていたが、きっとこの間趙喜兒は一人で、この『北風吹』を歌いながら、飢えと悲しみの中で生き続けていたにちがいない。パレエ化された作品でも、きっと真っ白な髪になった趙喜兒

が『北風吹』を歌い踊るところが最大の見どころだろうから、機会があれば是非それも見たいものだ。なるほど、なるほど、これが白毛女！

■ラストに向けて大きな高揚感が！■

本作のテーマは「国民党支配下の旧社会は、人を鬼（妖怪）にするが、共産党による新社会は鬼を人にする」だが、前半からのストーリー展開はまさに「国民党支配下の旧社会は、人を鬼（妖怪）にする」だけに集中している。それが「共産党による新社会は鬼を人にする」というテーマに移るのはラスト15ないし20分だ。

「1937年7月、日本軍が侵攻してきた。国民党軍は敗走したが、八路軍は勇敢にこれに立ち向かった」との字幕が流れる。張藝謀監督の『紅いコーリャン』（87年）では、侵攻してきた日本軍に対してアルコール度の高い紅いコーリャン酒をぶちまけて火をつけて対抗した（『シネマルーム5』72頁参照）が、本作では王大春がかつての「赤軍」、今の「八路軍」の兵士として人民のために奮闘する姿が教科書的に描かれる。日本軍の支配を排除した王大春の属する八路軍は1つまた1つと解放区を作り、拡大していったわけだ。そして、今日遂に楊家や王家たちの住む村にも八路軍は堂々の入場を！

こうなれば待ちに待った張藝謀監督の『活きる』（94年）（『シネマルーム2』25頁参照）などで見た地主の「公開処刑」が始まるはずだ。そんな中で黄世仁たちがみせる「白毛女」に名を借りたちょっとした抵抗は見物だが、結局山奥の社の中へ分け入った王大春たちの尽力によって白毛女が趙喜児であったことが判明。社に住む妖怪と誤解されて射殺されるというミスに至ることなく意外にすんなりと2人が奇跡の再会を果たすのは今どきの波瀾万丈の展開になれた目には少し物足りないが、まあ当時としてはこんなものだろう。八路軍の登場以降はストーリー展開の時間こそ短い、ラストに向けて大きな高揚感が！

■毛沢東の教えはキリスト教の教えとは正反対！■

イエス・キリストは「汝の敵を愛せよ」と説き、「右の頬を打たれたら、左の頬を差し出しなさい」と説いた。また売春婦に対して石を投げる男たちに対して「罪なき者のみ石を投げよ」と説いた。しかし、その教えを実践するのは極めて難しい。ところが、本作の『白毛女』にみる毛沢東の教えは、「地主から受けた恨みは地主に晴らせ」だから、極めてわかりやすい。黄世仁たち悪徳地主に苦しめられ、山奥に籠もった3年の間に髪の毛が真っ白になってしまった趙喜児は、今こそこの恨みを晴らそうと村人たちに呼びかけそれを実践するが、さてそれによって彼女の心は本当に晴れたのだろうか？

階級闘争とはこういうもの、旧支配者であった地主階級は悪いもの、そう割り切ってしまうえばコトは簡単だが、人間を描く映画としては地主もあれこれ、小作人もあれこれという姿を描かなければ、本当はダメなのでは？そんな目には本作の単純な結末には若干の不満が残るが、黄世仁のような反動悪徳地主を一掃し、原始共産制（？）の平等な村を実現した八路軍はやっぱり救世主？再び真っ黒なフサフサした髪を取り戻し、王大春と結婚して幸せそうに働いている趙喜児の姿を見るとたしかにそう思えてくるが、それってちょっと単純すぎるのでは・・・。

2013（平成25）年1月7日記